

## 「寺田寅彦『茶わんの湯』100年 ふしぎいろいろ展」を訪ねて

宮 英司

令和4年9月17日（土）から11月20日（日）まで開催された、高知県立文学館の上記展を2回見学した。多忙でご覧になられなかった方のために、簡単に報告をしておきたい。

展示は寺田博士の「茶わんの湯」発行100年を記念して開催された。そういえば今でも、寺田先生の「茶わんの湯」を読んでから、「こういう本を読みたかった。嬉しくなって母と一緒に寺田寅彦記念館にやってきました」という小学生が来館してくることがある。今回の「ふしぎいろいろ展」は、正にそういう子どもたちを不思議の世界に誘うとともに「なぜ？」についての優しい解説を文章と写真と映像を駆使して提供したと言えるのではないだろうか。

展示は、①茶わんの湯、②電車の混雑、③金平糖、④藤の実の4つのコーナーに分かれていた。入場すると、茶わんの湯の大きな写真に出迎えられた。まるで寺田博士の文章のために撮影されたかのような写真の連続。そして湯気の立ち昇る様子がわかる映像に迎えられるという効果抜群のエントランスであった。後で気付いたが、この写真は本会副会長の山田功様の貴重な写真であった。また、同じく本会幹事の四宮義正様も協力者として名前を連ねていた。何ともいえず誇らしい気持ちで展示室へ入っていった。パネルの一部を紹介しておきたい。

\*

子ども向け科学随筆「茶わんの湯」は、雑誌「赤い鳥」を主宰していた友人の鈴木三重吉に頼まれて寅彦が書いたものです。この話では、規模はちがっても似ている現象が取り上げられます。たとえば、茶わんから立ちのぼる湯気と、雲や霧。湯気を日に透かすと見える虹のような色と、白い薄雲が月にかかった時に見える色。湯気の渦と、雷雨の時に空中で起こり、ひょうや雷を降らせる大きな渦。茶わんの底に見える、お湯の温度のむらによってできるゆらゆらした光と、かげろう、そして、大気中の温度や湿度のむらによって生じる海陸風や季節風（モンスーン）といった具合です。茶わんの湯の話だと思って読みすすめていると、思いがけず大きな話になっていて、おどろかされます。

このように、寅彦は、ある現象のしくみを、似たような現象から推し量って考えることが多くあります。自然現象に現



（写真提供）  
山田 功 様

れる形に注目することの重要さが 1960 年頃に多くの科学者に認識され、「形の物理学」という分野が生まれました。これは、まさに寅彦が志向したことに一致します。

また、寅彦の文章は、大げさな表現を使わず、自然現象をよく見て淡々と書くことが多いのですが、これは俳句や短歌の新しい美を求めて革新を行った正岡子規から学んだ「写生」という方法とよく似ています。

\*                     \*

見学して一番に感じたのは、子どもたち向けに次々と準備されている展示物のこと。活字、写真、映像、音声、実物、名言、…。表現が悪いかも知れないが「これでもか、これでもか」と子どもたちに問いかける手法は、大人にもよく伝わるし、「ああ、そうだったのか！」という思いに至った見学者も多かったことだろう。私は長く学校に勤め、放送・視聴覚教育という手法を学んだことだったが、その手法と今回の「ふしぎいろいろ展」に共通するものを感じた。それは、子どもたちのために「実物」を教材として持ち込むことであり、実物が準備できなければ実物に近いものを準備し、子どもたちに体感させながら授業の本質に迫ろうとするものであった。

その最たるものが「藤の実」のコーナーであった。パネル展示で寺田博士の「藤の実」の概要に触れたうえで、「潮時」に注目させ、科学者としての寅彦と文学者としての寅彦という二人の天才に迫ろうとしていた。次のパネルでは「もっと深く！『藤の実』」と銘打って山田功副会長様の解説となっていく。その中で 2014 年 1 月と 2 月に調査した藤の実のはぜた数と湿度をグラフ化したものを提示し、最低湿度が 30% 以下の格別乾燥した日に藤の実のはぜる現象が発生することを突き止めていく。見る者をグッと引きつける見事な「深掘り」であった。さらに隣へ移動すると、藤棚が設えてあり、じっくりと本物の藤の実と藤棚を観賞できるという念の入れようとなっていた。

子どもたちの理科離れが叫ばれて久しいが、見学した子どもたちの中から一人でも多くの科学を理解する人間が育つことを願いたい。また、一見学者としては、寺田寅彦ワールドに心地よく浸ることができて満足感いっぱいの日となった。そして、展示フロアに吊り下げられた偉人の言葉に見送られつつ会場を後にした。

「常識とは、十八歳までに身に付けた偏見のコレクションのことをいう。」

アインシュタイン

「私を動かし続けているのは、未知の世界へのあこがれである。」 湯川秀樹

「物理学は結局世界中にどれだけ分からない事があるかを学ぶ学問である。」

寺田寅彦